武江年表

武江年表

江戸書舗　青藜閣

武江年表序

龍泉大阿之庵於豊城也蔚
蔚紫氣騰涛斗牛之間其
威靈妙此而修也於石函
雌雄似鍾呼何顕晦哉
聊拔其隆然其玉復
匿於淵之譚則生藏可窺知

矣其實一の益見矣由是欽〻獨
似可怪者即是泉阿〻威
靈而以傳于萬古而不磨滅而
顯晦〻聚開係而家大矣豈翅
家門凡物〻〻匹自有其
數存焉何憂〻失得哉
文人齋藤月岑家職〻孫

著書等千一種既行于世〻
茲又著武江年表八卷分
為雌雄矣取其雄四卷梓
〻其為書也自慶元韓鞬
迄于今日大〻天災地妖坊
衢〻沿革世態〻遷流物
〻權輿事〻興廢小〻沙

人之生卒神佛之啓合龍及
風諺俗諺称玩戲具經羅
不遺攙援尤勉凡二百年來
之事讀一注一來隨求隨
在旋去旋其易終而更無
繼岂無繼哉事勢殊常探
觚不苟退待來日耳其至

如象阿復匹金鱗搖沙彩
光射波易生美一今全見矣
其功可會知矣然刈此猖
之雄將以待來日者亦聚以
地雄雄相匹傳手美古而
不朽也與其何憂之之須
日剖刳發工發兆卜吉仍舊

貫之序云不敢辭便題
蕪辭以為延年荊尋云
永永二年屠維協洽五月
之澣

荊山陣人源瑜

七十若戰驅鞭鞍紙扇藍
輿致太平霸貽孫謀臣列
國日光高照海東城
試神劍羅并牧樞二百年
間不動兵官家今日真無

事幾霞高歌唱太平

四月十七日作二首

右二絶句去文化丁亥夏
日光宗廟帰忌之辰鵬齋翁因翁
之作を親筆取以贈先考ゆゑ取
以弁於巻首云　　月岑誌

提要

○慶元ゝ呂陳羅雲の化光世に被り穀下の繁昌日に隆せり此故に
遐陬僻境の人とりとも十里を遠しゆくせに厥佳業を省顧度たを
作くとんて鄙ゆへ父祖の名所図會あれども彼観の栞とし次に余ら
歳事紀を編して示導とし再此輯をなし村落耕壌のあるを
古武蔵華の梗槩を知るの一助とす

○此編に載る所の人以下の事実を解ることを不して地理の沿革
或ゝ坊間の風俗事物乃樹園に至るまで獲る所隨ゝ洩さず
公辺乃御事ハ例ひ知るへからふあらぐたゝ傳聞せる事も漏なれい
ゝに非ず漏せり

○此ゝ元以来新地を擬せる法度列侯の藩邸地を限ゝ所ゝ擬
寺社民屋も地を偏るゝ新に剃一或ハ特設の事に羅て庶を
異にするの類ゝ多ゝ数ふへからず故に見聞に及ひて一二を

況一領細の事にはよく不漏せり

○思ひ草士貞婦孝女の教恐賞を賜ふ〜もの枚挙不遑あり〜に

姑く斯編不脱せり

○前古事実密伝義の所其他有名の業浅草寺門跡の書画貝殼等

所をのて一二を挙す貴人公子は帰りて名々に漏しぬ近世永決の傳

もまた遺漏多〜〜（凡此編不備とは池永豹の話なり人物志青柳東里の内猿編老樗軒の墓前一覧十年氏の思ひよる日本の書を今多く〜）

○東武の人著述所の新編の書は半ば汗し校り完へくして板く就し

尽く為板ならざるに及ばい江戸の事跡名所等多あるものの一二を

摘て此編上本の年序を去るに

○所其の風俗を知るに人事は名所旧跡年事居蔵集事海内寄とりして

尚く故侯・農塚・浅草海・活・言・我衣・綺の絃・環・遊・笑・寛

陽の余毫・骨董集等の冊子あり〜に新に要を摘て記せのこ

○文化中編輯せる大江戸事歴〜頭せる百事一巻あり（他者の詳大凡新編の粋

載不省〜に出まで其歴る所事〜中〜に完結の日〜に及ぶ余の撰

も又集編不して五十歩百歩の譏りを免まじ再版書不に童蒙伝誦乃

数近載〜に此事も信ぶ不渉るをもて要〜とされと巻帙浩繁ちん

事を厭ひて多年者けり

○余園〜に浅耳聊見ありて〜〜に杜撰あり〜に出まで其歴少を参考し

撰者の賢定を須て精撰を尽さんとせば家絆の事を慮る其全体の明ある

べ〜〜とする事を願て書肆の求るに任せ草稿の浪費書不要剞劂に

して梨棗に不寿に庶家の大方の君子遺脱を補ひ誤謬を正めむ事を

嘉永新元戊申霜月吉日

本都神田鍛人

坂茂月岑重敬識

附言

東都市井の軍事業の始まりある旬日の間乃事と成
やも忘失事歟このごろ有年来新の人とゝ共に書
録りて往事を思ひ出もゝ世務の一端ともあるべあんと
神武稗官ふるくも坊間小説益あるの冊子なるべ
此編全部八冊なり天正十八年より始り元年に至る
浄書落成ほとゝもに未剞劂の功なく農家を急ぐら故
今年初帙四冊を公布を坊帙四冊清て幾許なる

己酉孟冬

書肆　青藜閣誌

天正十八年庚寅

今年八月一日台命ありてはじめて江戸の御城へ入らせ給ひその
ころは　御城の辺葦沼汐入の地にて田畠もとゝのはざる農家
も流れ〳〵ふかく立せりを茅ぶき長ふかり始て山を開き地をあらし
川筋堀の溝を掘て士民の居所を定めかひ〳〵しく万世不易の大都会
とはなりぬ　ものゝ〳〵ふ武士戈の危きを定め殺腹して
候こゝを極め恭仁の　御恐懼尤法にありて老中も申
おろかなるべし　中古より八月一日を田の実と号して佳節とし是を今年　御封入
八月一日なる故毎年八朔の御祝儀式の佳節と号し御恩例とあり
ぞ○今年七月小象伊豆一家滅亡小田原城あり○車駕合考ふ

御入國の後百日ホ行徳の鹽を江戸へ運送の為波地より船の通路を
城あり此今の宮橋の通ありといへり　天文より元亀のころハ行徳より小田原へ
○八月平河天滿宮　御城内梅林坂より　御城の北平河口へ移さる　他の年貢を納し中波地のに煙ホ絶きり
○夏伊勢の乱市をいくる悪殘鬼橋の辺ホ鶴湯風呂一つを立る
風呂殘ホ樂一殘あり皆人殺らしもとて入る　悪長見守　集ホ出
○因滿山廣徳寺　今八十坪　小田原ホ立つ今年小家滅亡の後江戸へ
来り今の昌平橋の西地を賜り草庵を営む　此時の伝説を弗要和尚といふ後
地へ移る○天正の頃軍来ホ乱波風間といへる強盗あり常を結び陣中へも
忍び入て盗をなす諸人苦しむ今年より初めて逃退て生埋
強らう　小家ホ代記　ホ

天正十九年　辛卯　正月因

正月冥八州の諸家菖蒲の御祝とし初て登　城あり云云
○十一月軍来諸社ホ御寄附頂の御朱印をなる○赤坂一ツ木町新坂
○十二月軍八州通用のため大判小判を造しめる　此時代銀一枚九合
○小田原の霊風山稲徳寺今年稲町へ移り後赤坂一ツ木へ移る
文禄元年壬辰　十二月八日改元
御城の西北の地大法書組屋敷宅地をなる六組ホ分て一番より
六番まての名目あり　是より番町
○因幡山塔頭寺天正十八年小田原より因幡へ移り今年
本郷町の地ホ寺院をのこ　是元年又頂田町へ移さる明暦の災後濱屋へ
波地の高岩も次第ホ江戸へうつる　移さるもの多の流れ江戸へ移せるもの
一ホのみあり又累て後小田原傾城町の軍幾人庄司左右ハ小家ホ分ホ住
ホて江戸へ移り西家のみのみ多くて居住し久ず城長の後傾城町軍基のみをなり

友深を訪て廓をひらけり尚文和の件ハ有るせり又小田原の豪家佐田さゝ左衛
友素明人ハ又霊香といふ眼薬の方を授りしが小原家ひひて後江戸ハ来り
本町四丁目ハ住して彼薬を售ふハ大ハ後
ありて行なる今ハ他人の家ハ製せり

文禄二年癸巳　九月閏

天正十八年の後品川へ寺地をゆたりしに日照山法禄寺開山英巻
道三河殿へ移る　天和三年深川　今の地へ移る　○慢窩先生　薮歛夫　始て江戸へ住る　旅寓の家　中条流
我有
と云
　　名命を得て貞観政要を講ぜしに用脈四景我有解の文を
　　繰りて来年の遨遊ゝ生ゝ　に系とも士岩武北陽田流波を云ふ文公先生文集ハ
　　見えず出られハ畢ハ慢窩和平集来ハ出るまる時
たりあきなうゝやら家を始りゆうむ新の月の来ふの北ゝ
○天正の頃常陸國江戸浦ゆゝいふ和ハ得る法是一羽ゝ云兵法の名人
あり土子泥仆思ハ小熊根岸荒角と云て名を得ゝる者ゝ三人あり
佛是来病の時荒角のゝ病人を見捨て逐電ゝ江戸へ来て微塵流と

名付一派を起して弟子ゝ多く隨ゝ上見ぬ驚の勢ひをあゝ一羽ゝ
二年ゝ病死ゝ病ゝ人の弟子荒角が事を受て孫橋ゝ
人の門江戸へ出て荒角を対べゝ議ゝ寵をとりて小熊ハ
ゝハ小熊ハ江戸へ新ゝ泥仆ハ國ハ止り麻布の社ハ荒角祠仆を祈る
小熊江戸へ出て文禄二年九月十五日日本橋ハ出る荒角ハ名命
ゝ官府ゝ出事を出て刀根岸を預り木刀の仕合を出るゝ
ゝゝ友人木刀を持て立合ゝ荒角打負ゝ出ゝ逐電ゝ
行方を知ゝゝ　　八幡宮の額ハ荒角と名書ゝ家ありゝと記せり今ハ見えず

同　三　年　甲午

九月千住大橋を始て掛ゝる　此地の話ハ国不熊野橋現別当国誌の記ハ
橋板を敷ゝ日あゝ　伊奈伯ハ後こを奉行ゝ中流急橋ハゝて
倒まて板を壁ゝ船中の人ハ木深ハ伊名度熊野橋現ハ

祈りて盛饗
○今年米穀豊饒あり
○小田原不老山壽松院今年西地に移させられ今の浅治橋の内に
ある院をのこる後年神田柳原の辺へ移り又浅草へ移る

文禄元年　乙未

武蔵小判改　光秀と書書に武蔵と
後の文字にて造せらる　○小田原尾張山本誓寺江戸に移し
あひ日比谷埋所町の辺に地をのこる後る嘉町の辺へ移り天和二年
の後今の地へ移る　○芝長見浦集云、永町と江戸市のあひにちひ
さき橋あり一ツあり是は往渡の橋なり文禄元年夏のころ橋のもと
に石の残親を埋めて永東称うち建てあり〜〜
官府へさきあさり文とり此橋を残親橋といふとなり今是を紅町
並江戸市町に今の残りの橋のあるに同じ〜〜

慶長元年　丙申　七月閏　十月二十七日改元

一歩並小判金始て通用芝長谷
霾又氷色隊色長サ巾五寸　○閏七月朝鮮人来聘　○同十二日大地震月を逐て
止ず　○後河臺を築る　○多田宗玄といふ人霊告を蒙りて京都
東山の辺より某師像を持下り本庄に安置今の多田の某師なり
○稲町常仙寺寂寞某師を安置

同二年　丁酉

神田不光院山感寺創　開山日感上人なり此地に移る地名浅草七年
松平西教寺後州より江戸後河臺の下へ移る　後寛永十五寅年本
より今の浅草へ移る　ところ八今のヤヨス
○八月三縁山増上寺日比谷より今の地へうつる　うつの南日比

谷町の方ふかし〜とぞこの辺をひや町といふるむ〜ハ湖入の地ふ〜て漁人海中ふ杭分の行を並べ立て魚のいるを待て捕ること是をひびといふ正字ふ〜今も海苔をとるふしびとを用ふひびせきをふかりの住居の地あるをハひや丁といへり後世はふうつまるてもひびや町と号〜けるら後り世ひとあ〜ふ彩寿町浜左ら町多く町もしも福ふ寿〜とを

○猿江泉養寺寇剣　○十月今風山高林寺後河夢ふ於く寇剣あり

後年移此地ふ移る

慶長四年己亥

二月国

四月今剛山龍宝寺天台　非因寺ふ革剣　寛永十二亥年

茂茶ら寛永ふ〜ら〜て彩〜ふ寇剣のち流物ふ〜ふ遊ふ〜ふ〜ら〜て大ふるを撰び十ふ〜て一二を徳〜その除ふ〜ふ〜ふ〜ふたぶ〜ら

浅草に移る

同又年庚子

小判ふ光次と墨書せ〜を極印に改〜る　光次ハ徳家の名字ふ〜

○六郷橋再撰る　毛呂ら云

○始て京都ふ銀目代を置る○沈上寺門ら大塔建立　翌年ふいたり全く成就せ

同六年辛丑

十一月国

又月大小分判挺銀の形制を定めふ　後河江戸刻板とふ　大金銀もしは時とり鑄る

○貞観改要板成　孔子家語武徳七書板行せ〜めふ　治世以来の刻ふ

○安南始て奉書寛永九年まで通信ふ絶東埔寨始て奉書寛永

四年の后絶ふふ〜ふ〜ふ〜ふ始て奉書芝文長十八年近今年ふり寛永十五

まて二十三年の間清朱印船ふて我邦ふ〜高人亜馬港ノヒスパン選羅安

南ふ〜ふ宋ふの國ふ〜ふ年毎ふ行て高麗〜世和ふも彩ふ〜ふ高ふ

本年ふ〜ふ絶となり　以上茶屋雑後而載

○十月十六日大地震房総の山を崩し海を埋立て成又海上俄ら潮

引て二十丈町ら流て成る十七日潮大山の如く巻上流死数〜

○十一月二日巳の刻後河町辛く悪家ふり火を出て世大焼亡ふ江戸町

一丁も残らず人多く死ふ年号尊友ふ年絶ふ序ふ

板葺にあらたむべきよし　官府より令せられて町中ことごとく板
葺に成る所に瀧山弥次兵衛といふ者諸人に秀(ひい)でゝ家を飾らんとてこと
海道表棟(むね)より半分瓦にて葺後半分をば板にて葺たり諸人此を称し
ければ本町二丁目の瀧山弥次兵衛が家を半分瓦にて葺たりさへも
珍しき事なりし中に奇特なる人なりとて異名を半瓦(はんがわら)弥次兵衛と云是江戸
瓦葺の始なり　以上慶長見聞集に出

慶長七年　壬辰

を泥(ずゐ)縁て奉葬慶長十一年より　并慶長見聞集 後に出
○小石川無量山寿経寺御菩提所と成傳通院と号し殿堂御営建
立あり紫衣(しえ)寺となる

同八年　癸卯

今年江戸町割(まちわり)を命じ給ふ慶長見聞集に日本六十余州の人歩を
よせ神田の山を崩させ（今駿河台の東南なり）南の入海四方二十余町埋(うめ)させて家
を立させ給ふと云　是までは大名小路の辺八代洲河岸三河岸の辺麹町の辺并本町辺
連りてありしとぞ　江城の辺むかしは千代田宝田祝田芝崎の
村あり南伝馬町小伝馬町大伝馬町は宝田村のうちなりしとぞ
千代田宝田ともに今の御城の内大手の辺なりしといへり　祝田村は幸石町銀町の辺之桜田
村は今の桜田堀の辺なりしを　御城御造営の時今の地へ移されしより桜田町は
尤古く御打入の時家なかりしよし　神田の内にて赤坂一ッ木の町屋にありしを天正十九年の
ることなるよし　或古記に見えたり　三河町は江戸御打入の初三河国より従ひ来る小人を
に旅宿の地を賜はり爰に居らしめ給ふ所を定めらるべく本国より此所に交代
せしむ後に町屋に成りしと古名を取り三河町と号すると云　猿楽町といふは観世
大夫の屋敷ありしを後に外へ移されしよし　神田にあり
平川は村名にして平川といへる流あり今の江戸川護持院橋筋より竹橋の上の方より
飯田町下魚板橋の西へ出て一ッ橋のかし東南の流白銀町池町浜町の方へ流る今の
常盤橋も平川筋なりしと　平川の流を埋て北の方神田にて芝崎道場もあつて有し今の浅草
誓願寺も東部にありしと云　是は今の　御城内　御本丸廓の辺に社家あり
しあり平河天神又山王社薬師御前（昔は田安御門内と云）雁山稲荷（今麻布）法恩寺（今本所）吉祥寺（今駒込吉祥寺と号す）
寺薬師（今麻布）東光院薬師（今下谷）大法寺（今押上）源照寺（今赤坂）浄土寺（今小石川）金地院（今芝）青松寺（今同所）西運寺（今同）
正覚院（今平河辺）梅窓寺（今浅草）養玉院（今下谷）妙顕寺（今浅草）法禅寺（今深川）これ等の寺もありし

御城地広がりしかハ各代地をたまはりて　御城ちかくありし寺院ハ後年ひ替地をたまはりて当時の所へ
うつりしもあり委しく記すに暇なし古記にいへるもあるハ思ふに
落穂集云町方普請の儀ハ只今の日本橋筋より南之方海なり埋立場をおもしろからず始
ハ本にて是より深く堅場横場とも不出来にて其揚土をもり端ハ山のごとく積上たる所を
後ちより御築き被成候にハ町人共頭出して町屋を割下され其外に付旗本衆の揚土を
引取地形を築き立屋敷を作り表通りハ内へ其先に落垣なとにいたし並びに家並をつくり
引揚り始め頭にて町屋形ひの荒地も多く今に其形勢の名残数多来り屋敷も
往還ものこことく町屋並来ハ已後表に至りハ旗本一町の内に半分ハいせみともに出付
見えたりとあり云々　事跡合考に云三河屋　御入国の後材木町新に並べてあり
後年武士家屋敷となりて東の方へ移されしもの今の材木町なりとあり古町の事
に詳なり今ハ及ひゆかりわかりかたく粗き
をいとひてこゝにまつ記しおくる
此の時日本橋をはじめて架けたる見聞集云大川中ハ川中へ東方より
石垣を築き掛け渡す板の上二十七間四尺五寸広さ四間貳丈八尺余あり
又云此の橋御普請の時分日本国の人あつまりて掛る橋なり此橋の名を
人あふいて名付ぬ天よりや降りけん地よりや出でけん諸人一同に日本
橋とよびぬる事寿代不思議と沙汰せりと云々

○夏の頃　台命ありて九月廿四日愛宕権現社勧請なさしめらる（此時八幡の坂なし）○同月芝増上寺鐘楼御建立（此時弥田にあり）○弥田山幡随意院神田（にてありしが後元禄年中に今の地へ移さる）開創（開山白道和尚）

慶長九年甲辰　八月閏

二月日本橋を以て定められ東海道及び東山道奥羽の諸道へ一里塚を築しめらる二十六丁を一里の積りなり（塚の左右へ榎を栽しめらるまた夏ハ木陰に休ひ冬ハ風を防て旅人の裨益となし青木氏の説に銭が十四文ハ今の不審なしといへども此附代銭に…）○永楽銭の代りに鐚四文を当てゝ用ふ（しそ十六年に一文を四文にあたるとかんえてより諸物價も騰りければ武家の方ハもちひもありしとあり）○久臺山源寒寺湯島に開創（開山円誉霊門上人）

同十年乙巳

増上寺門前の花屋暗を感じて和尚に告く翌日仏殿営構の
台命を下しぬ又この年本堂回廊等御建立ありて大仏殿とも方丈も

世時出遊営有しと云　事跡合考云世古営の遺構の由なれども考ふるに不審なきにあらずとかや

○大城御普請ふ付押町の辺御用地ありしの辺の遊女屋も元禄

頃ち並へらつる○世時代迄くふ道橋無くしあり武家藩邸稀なり

○南蛮とりタバコ蕃椒を渡る長崎ふて接ぎ切りしめてタバコを載る

一説天正中蛮人持渡るもいふ

寛永十一年　丙午

大城を築起ふ三月より始り九月ふ成就あり　その時石垣地形清正地形なり大石を献ずる者多し浦ありひろうは自ら奥州のお立て者ども　○選擢御書并物ども賜る波江の使ひ来る　寛永六年

を免賞しめらるしといふ

の城を大なり商船ハ石城米田彈ハ御書ふ下ハ以上系唐紙ふあり系図云田源といふ

き城米田源ハ清正家臣なり

○六十六州行突を続て拾る○本丸清正三河福島の後河を受とり移し

のふ○十二月八日永楽銭御修正無ども有日本橋へ高札を

立てる　武十三年

ともいふ

小泉氏廉の時寛永通宝永楽銭を用ふへしと令せられ銭ハ上方へ上りしと天下佛

一統となり二銭免定て用ふ者なしとも永楽一銭のうちりふびと記ふ銭を用て者ハ是ふ

初めて是あるを云ふ〻ひ万氏安〻ふ上りて今年永楽を正ひ〻中ハ象ふ代記ふ〻

或記云永乗銭一貫又金壱枚ハ壱貫ハ金ふ百銭ふ一銭ハ百銭ふ是を称し

而〻ふ永納の年貢あるハ世迄風あり〻ひと百銭ふ一銭ハ隔きて是銭と称ふ

永楽ふ一せんの價を除て九十六銭を以て通用もといふ

同十二年　丁未　　江月図

二月十二日より十六日まで　御城の辺ハ観世金春勧進能ハ行あり

同廿日同所ふて雲の神子ハ国勧進舞妓ハ行あり　貝殻ハ集ふ拾ふ〻お雲ふ村ハ名と

〻ふ人の娘と云ふ〻お不うぎ　○烟草法州ハ渡る上下ハ男ハ煙ふ刻て紙ふ巻一これを

の事ハ出来の骨董集ふ〻

巻て火を吹て吸ひ煙ハ出ざるを用ひて紙ふ巻ざるの製ハ是の後を

用ひ或ハ竹のラウを用ふ又大きなものを下ふ入れ遊ひ出せる者も人〻あり

○通潮図白仮井公御下向あり此時橋を本町ち改めひ〻をあ

ふ

ふくせらに家いてこし故ちとうあつめても事しえまつしを

東之方見るかむかしの武乃江戸うくへいとひろしの南田川あり

○同二月朝鮮信使初来聘　正使尼子紀伊守副使慶選筆丁好寛　○八月八日客星現ル

慶長十三年戊申

林道春先生御傷者ゆ命せらる　世間ゆ先生後乃ゆ立り

同十四年　己酉

二月二日月の容方ゆ〻ゆ現る　皇年代畧ゆ方形　月出滿没如蕃

○二月島津庚琉球を征して沖山を尚寧を將ひ来る

○八月阿蘭陀船入貢奉書　唐船始て来

○烟草御制禁　一説元和元年ともいふ　○秋品川海乃筋西山際より海端まで二十

町乃間乃道幅を廣けゝを世還自性をあらしめゝ

同十五年　庚戌　二月国

芸愛宗権現東社拝殿閉門石階水法建立　田舞もこの時建立元和二年の丙辰紀行水路ゆ見ゆ

造りひろげて今ハ大廣とありぬと云　○銀町ゆ知見院御建立　後移院の四処あり

○七月十九日勅して増上寺十二世貞蓮社源誉上人へ善光観智国師の

号を贈ふ　○八月琉球始て薩府并江戸　御城へ入貢を尚寧来聘

○宮醫吉田宗桂卒　年三十五　其子宗達又良医の誉あり大橋宗拙也宗桂の男あり

同十六年　辛亥

正月二日竜口蒲生侯海落失火生門ゆ仙人羅漢の彫物ありて英藻

あり〻ら世時焼うとて　○琉球聘使来　○京生弁　耶蘇宗再裁

○龍恵山雲光院阿闍梨丹遠立　る哈町の　○六月井戸日加藤肥後守清正卒

○宮醫養安院正琳卒　年七十七　玉菊〻号山城国の人なり曲直瀬道三の門人ゆ

なり後俸を遇ゆ三百ゆ張て別荘ゆ退居せ　〻て順の姓を冒せ芸ゆ十年江戸へ召て宮医ゆ

慶長十七年壬子　十月因

亜馬港卧亜らめ奉書元和七年之新伊西把弥亜始て奉書をのち
あり〜○七月廿日大雹降○大雨造り傷米因て祈禱せらる　雷鳴を好と辻切を云
の恐愛あり
〜〜〜

同十八年　癸丑

漢又剌亜始て奉書○六月七日神田社地を通南伝る町へ始て市議あ
り○九月千葉家後統国分庄を傷心揚といふ人先祖右衛門尉を捺相を
牛御前へ寄進す○十二月耶蘇宗の出浅米ふ於て禁せらる
○法華宗清甚内因て禁せらる　法華元年蔵の辺寺院の刑罪場あり此の橋を
今も甚内橋といふ八月十二日なり今もまつりを
あり
〜〜

同十九年　甲寅

那波道圓　那波路舟橋寓先生の門人之　又ふ随つて始て江戸へ下る　此時廿九歳の時把州
手後数度江戸へ下り　後の招きにより把州へ下る
後流の法を伝へあまたあり　○八月廿八日東刻大風塔上寺山門撞鐘山門倒る
人家損ず　和川九品寺文堂の塔倒る又安二西実年減亡せ〜而ふく
百六十九年を経て減せるとも〜因人少集不因人
据あり〜よ〜絶くられば因もの拾ふも忍ふ事なる　こゝふつよ九品寺洋妙寺
とも九品寺とよくるの縁起ふも又元亡文治年万里居士の拾遺を元亡拾ふも既ふ妙寺
文層の据とも　いまいふ安中ふ焼さる又元の
あり尚考へ　○羅山文集減百五十五巻　利彩の書六十本あり日本
第一大部の文集といふ
○九月南蛮人阿葉陀人来朝　この時あり〜ヤンヤウスふぬそろ〜〜地ふヤヨス
沖後人ハチクワンふぬそろ〜〜〜人友町といふ
○十月菅長貞少集減写年十冊　編出三浦浄心ハ中年家ふ仕へ〜十三ふ本を
菅文長貞永上の著記あり此うち小菅文代の事を拾孫せるを小菅文代記と題して刊行
中原の拾孫を菅長貞少集と題せこの菅本見少集を拾孫して年代せるをそぐろ
あらう
といふ

十年間記事　左ふ九月を西暦の六巻第六巻長少集を拾孫せ

江戸町に川多くありしこと皆堀川なり　御城の堀をめぐり日比橋
流るる川是一筋本川なり元和の比神田明神の氏子西南
に山を擬現の氏子なり
江戸ふかくとり網き流さず一筋あり比ろ神田山麓の柵系とりあり
なり　中略　班子　御城堀のめぐりを流れて永町に落る比流ふ橋ふり
渡せりさまを中も皆たなふ橋ふくく名もあれ橋ともなり落も多来
侍うもに以渡かるふの帝をとり日本橋後ろる数百人の農人江戸人
来りこれをすてをしてあるふ雑子ふまもちろ好ふ渡ふ
とり雑子を集めふ班流のふ上ふ家を飛り雑子を隠りあく
入亜ねを雑子ふのあとふ橋一ッ出ろり支を雑子橋と名付ろり
の町名を雑子町とふ

井の水へ塩さし入万民見をあげくるを懸みなひ神田明神山麓の
ふを小東の町へ流し山を山本の流をを西南の町へ流し比二ふを江戸
町へあまねくふへふ
虎の御門とり愛宕の辺田地ふしる畔ふ接の水ふ百本もあり接田と
いひ田の中のあれをさらふ川とのひ今の源助橋中所のふふしとて
殘りしるとふ云く
江戸町繁昌故勧進能毎月毎日ふる事ふ
一能ふるふふ　一町ふ為ふ芝ふ出ふ浅草に出ふ浅草に出ふ
毎日勧を能方で法人ふ拍　一万菜楽の遊舞ふ奏命ふ文年を表ひあり
江戸町ふ大谷年人とふふの居風呂とふふのをさくみおく
見人関集ふ蠶塩ふ浅草観世ふ湯島天神神田明神貝塚山を擬現
接田山ふあくご堀上ふ吉祥ふ廣徳ふ弥勒ふ東光院常泉ふ事彩と

あり、あられども、まもなく張らるゝあり、〇市ヶ谷の富士（市谷坂の上、あれ一ツあり）約迄へ
うつして莊嚴をなす。六月一日大市立て繁昌せるとぞいふ
以上寛文長員人文仕事ふ不載（拾るゝ因後ゝあるべし）
〇この頃傾城屋定りて廓なく、所々に散在す。麹町八丁目ふ十六七
軒京六条とゝ寄る遊廓河岸ふ十ヶ所、後ふ弥勒町とゝ寄る大橋の
内柳町ふ於て慶長十年ふ元禄頃迄引続き大橋ハ今の常盤
橋ふて柳町ハ今の道三河岸のゆなりと云。曙世翁の寄海考ふも京の
遊廓を繁て後ふ云是普通の説なれと事ふ合考今の京橋吳服町の
京葉沼の汐入を築き高く傾城町とし、元禄くして一方ハふ
南の片側をすゝ町ふの片側を柳町と名つ事中一筋の町と
名つくと云。この説ふとれハ寛永の頃ハ傾城町ハ京橋の柳町ふ今

柳柳町ふみ町ありと云。たのあとのあるとし柳風ふうれてとちく
あびこ云ことゝ云ふこの説ふ有り。〇あり
この時世風呂屋湯女ふ有り（見聞集ふ天正の説の後湯のゆを云て後ふ
云その説ハ風呂ふさんきんの人あまくあるて
のロふ立ふさうぬるき風呂を沸し、ふ
あて入るなり湯女といひてあまめけるを女ふ廿人世人ありて
ぐ抱又ハ外ふよりあるくこゝひあくくんきゐいふ法ハ女房ふも湯よ寄ま
といひて拾ふ銭を浴世ふ云ふ云ふ云くとあり後徳集ふ云風呂屋ハ戸ふ
あり朝ふ夕ふ晩ハ七時ふ仕舞ふ至のうち風呂入人の垢を流ハ湯女も七ツ切ふ
仕立ふ夫ふ外の女ふを個ハ客ふ外ふ出ハ火を焼ハ外の湯女ふ立ふ
ふ手ふ外ふ外ふ客ふ風ふ客ふを引ハ火を焼ハ外の湯女ふ立ふ
小手ふ外ふ外ふ客ふ風ふ客ふを引ハ火を焼ハ外の湯女ふ立ふ
太の風呂ふ外ふ換町辺ふも一二軒あり。〇書籍を板ふ刻む事ハ始詳ふ
〇書籍を板ふ刻む事ハ始詳ふ正治中拾字大学経の事京都ふ
員人元久二年法然上人造る所の選擇集を板ふ彫ひ事も元久
ふうされと戦国の兵火ふ罹りて天正の頃迄の板刻の書籍ふ事
あくまでハ。〇ハ寛永の頃ふ長ハ京都ふ書を利用ハ寛永の頃ふ

節用集などに浅草に梓行し来りしが今は絶滅の書籍多郷といふ所を初めに製し寛永の末の御代の一盛事なり

○好古日録云信濃云若挑灯は豊臣公の時始て製し上下を蛇腹にして編笠の板を用るは是長州侯の殿中にて云天正以前の挑灯は竹を紙を

貼して用ひ男山安居の頭の屋に用る是なり遠製なり手軽なる故

年中重宝なる合羽なりとつたへて製造したるなり挑灯の名は西京の骨董集にくはし

○二條城始て本邦に渡り来りしは永禄の比にて泉州堺の産

渡り唐船中小浦といふの深弘といふ世上に一般に乗ること

元和寛永の頃なるべし○泉州堺の織屋に安小西清兵衛明人に

習ひて始めしを製し○京遊廓賢玄長の頃の風を古西に見なく

老ふるに男の肩つき髪挟くさうきき大に別或は年所若人は若くし

落くして中剃をしくり何まも額に角を入て撥さり髪に脳後に

して曲を吹くれもさり衣彼に廣袖もあり羊毛の彼をよふ是なる

ものとて小帯をしくるもあり是とのの彼さまちて是る所を是羽織なるも

べし丈いちぐ死も長きもありて一様なるに年に古の様を年の

辺ふくよせてこれを拡めてことあるあり是を用ひ是あり年の羽折袴も

あり級を大りて撥開けのそひ廣紀に小級をその是に付ること一大形

なる撥拡を色さしに深くるも所のり編笠に編きも長紀かさ

見ゆ是髪を草びび煙小級を地色にみて結ひ級を付年に幅大

さして縣尺さりりやわらんとかん事を是後に結る処に元さる八結

めを中小横こしるるや武士に小の下緒を年に引通しくり下の

男に敷髪なるもあしりまも緒まして彼を是さり彼の髪地に横結

白く搗あきさるあとゝ　之の刀を持又後をのつ女ちよきゝんるゞ髪毛ふりて乱して
下け髪を衣の下ふ長迄よ下ふ衣うつぎ〜〜う帯ハ男の帯帷子同し
常の女ハ赤髪を肩のよふ下ある袖ふ切く赤さ毛ふ黄さう髪たふハ
おさゝ地く赤ねて縫の後ふ下ありう前帷の裏ちへて赤〜衣裾ハうゞさ
の衣裾ハさ毛〜〜あれこゝ〜縫のうふ乱ふてあり上ふ横筋たく
細く色〜〜ふて上ふ色ふ帯り〜〜ふる中ふ紋付ふる毛見ふこれハ
練絹今云羅斗目　又縫ふる毛宜べ紋の女ハ紋ふりふりあふく長柄の傘を
擎き又ハ色〜〜の絹を縫合ふる袋を負ふう足も衣裾ハ横筋なり
又女の髪ハ市女髪のやふうふう布を二布合て縫ふる後のうふ
展下まて下あふるあり又手拭を髪の下右の方ふ垂のうへまて
さげふるもあり又男の肩衣脇擦くひざ

あく小袖のめくりき合て長紋服の下ふ横筋を縫ふう黄ハ武士ハ文ふ
総髪の上ハ花人ふゞふハ髪下毛ふ天和貞享の比まても多ふ有て粧
毛後も猶ふ見ふ毛又髪せ長ふ高ふふるもあり云く

元和元年乙卯　六月国　七月十三日改元

○吉田服稲荷社建立　○六月十一日吉田藏形心寺一説六年庚申ふ

○六月十八日山王御祭礼　練物始ふ江戸城内へ入る大往る町ふ数り
ありしとふ今ハ絶ふ毛其物町ふ張新ハ寛永中北面を守る所ふ
北地の工藤文も春日の居ふり山王社を附属ありて当所ふ祀ふふと云
○小石川白山権現社勧請ふ毛高地ハ今云所殿跡の内ありしふて後
巣鴨ふ移り今の地へ移る

同二年丙辰

神田明神社神田橋門ふり湯島へ移る○巣鴨明神社近江門外ふり今の

西へうつる○二月浅草瓦町和川村觀音堂を造り始め十倍一丈八尺の彩佛を造り始む○二月花屋敷の
領ひ山村傾城町の場所一番所山下へ移る○十月神田川堀割普請を築せらる○麻疹流行
○朝鮮人来聘○羅山先生丙辰紀行成　此紀行ハいふ迄なきあり今記載
ましまいたれ人多く来往をとゝ
けまいたる大士の日人ハ後生の事も考りなるべかもの人のり安りハ男女群集まるの京の流行あり
もあくいん元りの云くとあり陸奥ハ世を世をいのこ今ハ老衆ハいさりて三百二十條年一の
背あり今ハの繁昌万倍なるの思ハべし事海舟考ハ云寛永の頃まて今の蕎麦町八
松蕎麦ハ有りしハ門おとり東叡山の岩陰際まて葦一面ハ繁りしハ谷ハ一眼ハ見えず
うるの内ハ繁花ハ有りしとあん又寛永の頃蕎麦
橋多くありて遊観のところとせるよりいひつくり

元和三年　丁巳

正月十四日光源山天徳寺焼亡○神田山智恵子慣随意流下谷沈の場へ
うつる（万治二年今の地へうつる）○春月遠国動乱の後太閤とう火起て堂塔焼亡を

以附灵像烟中を免かれて源のうくハ立あくと云く○切腹来貢紀滅一冊羅山先生編之又寛永二年の
編もあり○元和年間　小田原産　初名を周　宮海を渡りて遊女屋を一ツハ年号の発祥
尊屋町の東ハいとあむ望年十月善徳寺ハ寺を開き高野をそしめ
吉原町と号ハ　そもそも始ハ吉原ハ云ハ町始ハ日本橋より東へ
より東へ町割をなせ先ハ町と号ハ京町宿町ハ京町宿町ハ
大坂町葺町新町あゞく名付ハ遊所ハ多くハ変ハ
こゝてこゝもゞりハ揚屋町と号ハ城郭とも敷ハ
ちきこ新日ぶくをあして是をかんせけるを
いろくさゝのあそひして真ハしるる云
葦ハ葦つ潮名をおやおとりハ吉原宴殺のるハ
ハ年ハこゝをのそうくハいくりこそ紀
ありそをたるハ侍ハ房総宴ハあるて世
士彩揚屋ハ紀新町敷ハ町方二町とあり
といふとあり思葉橋ハさらに橋もこの
吉原ハ沈ハ方ハ沈ハ
の方こ云ハそこれハ今の俗云ハて
紀ハ熱廉子ハ橋橋のこ字を用ひ
ふこ沈の思葉橋ハ今のあるハ橋

元和二年　戊午　二月閏

二月浅草寺焼ル　御宮御造営あり　今の浅草堂の辺なり〳〵とかや　○日本橋御普請辺焼ル　○十月宮の剣長雲が彗星か

○同日西勅堂御再建十一面観世音を安し奉る山形長谷寺と

あり〳〵　中興宥山秀等伝記あり

同　又　年　己未

夏より冬まで雨夜白気東南の方より西の方に長数十丈又

彗星東北の方にあらわれ火光のごとし〳〵

○又月より八月まで大星又数々〳〵人家多く死ス

○大坂御立番始　○長谷川世尊寺の西久保八幡宮焼失あり

時の鐘寺創後改宝中芸州侯移る　○九月十二日将軍先代年

九十九才二月八林道春先代の命なり名波乃円塔に云

菱糸得菴松永昌三之宅寄斉ましますこと世不改也

同　六　年　庚申　十二月閏

稲荷山善門院陽田川の辺より亀戸村へ移る　○二月十七日後水尾院

光明寺薨　九十二才　○十二月二日塔上寺中真観智国師入寂　七十七歳

○浅草御蔵始て建　○日本橋を築せらる　元除の為小築せらる〳〵而

西方仮橋なり故小板を敷せらる或八

日数六十日にて完成とも云て詳かに

なり日数六十日程の法会

同　七　年　辛酉

二月親世子吏一代能奥行を傷新来詳

○九月廿二日小塚遠州侯上京殺生禁友達るの儀とて称宗

川の中より酒肴菜ふと送る〳〵

偽り病んとちかるもあり人をさこわもきさせのさこわもきさ

○十二月十三日織田有楽斎逝　七十才住居の町を元数寄屋町と云今はあり宵乗寺住居あり一説

元和八年壬戌

活所遺稿　壬戌元日遇雪

雪隨世事正紛々　閑座牕間東武春　諸葛青蓮開隻眼

笑而不答當時人

○十一月源通村卿筆を東江下向あり江紀行を写す海道記とそあり

十二月十六日

江戸を立て人々あひ別るゝ家士とて奇くよろこびしゝ

家士のねらみやいとこ同ひとふあてとふへきことの始めてなき

同九年癸亥　八月岡

正月明の後遠藤邪統邑除勲後まちの親者者のこ字を書して

歌を掲る○正月又日稲葉白道幡随意上人寂　七十に成て上人世の時の人の寿数あり法人そなみる

出の名号を唱ふこと五万遍年中社田の地に落涙を流剣を擲抜く流

○十一月十六日基作卿同坊日海寂　六十に成て寿数と長に一説十月とあり

世年間死事

女奇特数を抜せしれ男奇特数とある　女奇特とは遊女の情をしてを

てを決ふを　○年所一説月とり葛西まで婚通して一二三に又の婚を掛

撰て猶とも　毎婚せしもの六元和とり寛永の始の男の事ありといへり　慶穂集

寛永元年甲子　二月晦日改元

伊勢伊雑宮とり長宮出に市双太神宮を江戸日本橋通二丁目

ふふふ同十年ふふり今の地へ　麹町代地　近藤ふふ

○長崎法平靈夏を感し永代寺ふ八幡宮を勧請して同八年再

奥あり○同郡村岡勧堂古再建○伊西把弥亜後来

○東叡山寛永寺建立開山慈眼大師あり 事源金考に武州の慈堂古跡の地を尋ぬるの所あり一所にして

慈眼大師の旧地伊賀の上野あり一所駿河国安倍郡の内にあり一所にして

のみ唱へ来りしに永くこの地の名あるにあらず小祠唱高社と今の事源院の辺に

あり一を世俗今の地に移さる又武蔵山谷本の

名をうつして入谷村の町を故本町ゆゑ

○道灌山霊巌寺寛創 世俗今云夫巌寺の地之雄鑑夫巌寺人物

を学び武蔵辺を平治して建立あり一所なり

○明石志摩守助宥右撰し号一所を浅草町あり 時天文六月奥州沿動を

あるとき一古今 角力の始め

撰大全未見る○二月十又日とり中橋広敷中村勘三郎芸能

始りの奥州沿 世俗橋ひとり一ところ

建あり一所なり一ところ

○十二月朝鮮人来聘 正後通改右文鄭豈副使通

別支美弘賓法事幸孫栄

寛永二年 乙丑

湯島の麓祥院創立 寺山芙蓉山渭川劉和尚この時に報恩山天沢寺と云寛永十一年

癸卯九月十七日遷立あり後二位

麓祥院仁阿弥大姉と号す

○南八丁堀二丁目に本一橋弁財社鳥社あり一ところ弁財を鳥社に移す町屋建

つ故今年の春橋社八幡宮のあり一所社を移す 高橋の西に社の橋を

○八月 稲荷一橋大工の[illegible]三丁目人数一人宇[illegible]一橋同三丁目人

数一人寺に宮一ところ

同 二年 丙寅 四月国

毘沙天満宮鎮座 寛文五年造営 造営に是大金弄氏作物の切あり

○同じく八月三浦の[illegible]人数○二東海道[illegible]

○耶蘇宗再發○九月上野ヲ
神祖御宮御建立 [illegible]院号円教院と号せらるる今多くあり
○十月吉原ヲ町の郭く全く繁昌す すみ町は京橋のすみ町より
今多し引続いくる町あり
○武義志料ヲ賢永記ヲ引て云寛永二年十一月十日鳥丸大納言
光廣卿法ヲ向の序江戸須田町を造りあひ須平親王の古墳
あるを見ぬひて帰京の後勅幼の儀ヲ久しくれい勅免あらん
事を願聞ありて同年十二月九日勅免ありしを神田の社内ヲ
まつりけると云く 按るに元和二年庚辰の丙辰紀ヲ神田社に平親王の只
を祭るとしるし記されたるを寛永二年の誤ヲ記されたるを記されたる
社記ヲ誤りしなり

寛永四年 丁卯

二月深通村に御下向あり 武蔵国稲毛山真雲寺
読岳和尚く造ル
繁昌の名ヲしるく武義の〆蔵のうちの家あり
○東叡山に五門常行堂法花堂二ツ是 経堂多宝塔等御建立 此時法華宗成就
○四月八日芝愛宕山権現社火災 後再 法道覚秀
○大地震○十一月塔伽沙吉来使の名を理伽ト云 ○新羅と琉球へ渡りし船
の往還ヲ始て渡る 其前ハ編の新樹ヲ小舟ハ八十年来のたゆまと
あるに江戸ヲて七万治寛文の頃より初まりしなり

同 又年 戊辰

正月二日京桂紀伊屋又吉文といふものの元来無学なりしを大師
河原弘法大師の示現を蒙り六字の名号を書くとして二月廿一日
名号を書して学ぶを弾を立く 霊巌川堂五造立とい

○正月廿日　柳営小松くに御連歌會あり　是ハ鶴岡八幡宮の会にならひ毎年十一月小あくこなる

○五月廿二日入谷正覚寺開山慶斉禅師寂　三代家綱より崇敬し人なり寿百四十七歳と云ふ

○一刀流小野派剣術祖小野次郎右衛門寂　世の人皆江戸小石川の祖と称して小野と敬ひ奉る

○十二月十日宮廷今大路道三寂　八十三才

○所々辻斬あり　○十二月麻疹流行　医師多達元庵をよれ　冥土へ帰りし者町二十四人

小石川　冥土へ向の記あり其時の句　むさし野ゝ名ころもしら富士の雪

○江戸市中の集を掃ふ事この人ゆゑなり

寛永六年　己巳　二月閏

六月上旬より因幡村不動堂新造成就せるゆゑ仏像を

江戸市中老若男女群集す　○七月廿七日玉宮澤庵の上人僧を

流さる　沢菴八羽沢上の山玉宮に奥沢郷舎く統く　玉宮の法嗣正隆大徳なる人世の

終年ありて玉宮江戸沢菴の三師流罪せらるべしとあつて江戸にあつめ

らるる玉宮沢菴上師をあがさるる下地大田系とり二師ゆるされて奥羽の方地へ統く

沢菴師一偈を

のこして別を告て曰

天分南北両鳧飛　何日舊栖同翼帰　聚散無常只如此

世情禽亦有樞機

玉宮額を和して云

草鞋竹杖與雲飛　舊院何時把手帰　水遠山長猶絶信

別離今日已忘機

八月十五日沢菴完上小石川

完上川ゆ流れ月も流さるてあちこ深世ふすむひも　沢菴

ゆくさやことひの月をなちのくのあとやの松のけふこんこい　仝

二師流罪のるゆくへ沢菴和尚を講をうんて

ちるべこの時　仙洞の内うこ年

ちるあ年海の落も玉の宮もあるまでのこるこの月

けころ氏名の始まり

江戸喧嘩を二まとりすりてつまりいみをうをとりのこる江月

○今年より武家方にて辻番を置る場所に於て辻斬あり〜かくて

寛永七年　庚午

正月八日隅田川あて

古塚の老木〜社柳の第一いさ〜とむ前〜る所　柳枝を伝

○二月十日醫師田野道幸率　百十七年より江戸の医師て流りしや伊豆武蔵の名を出すこと始めなりうひの道幸一族十六流と唱あるきりなり

とう也著述の医書を梅花堂に蔵す

○二月小溪誕生寺あり〜布引祖師像并辻堂ありて〇正月二日身延久遠寺日遠沈上人門弟

日樹宗論日樹伝記版図に配流〇六月琉球人来聘

○同廿三日大地震〇八月山王社造営

○魚籠観世音三田の地に安置　年山法華上人作の由なり勝れたりといふ

○十二月廿三日大地震成刻光物飛行〜生者多きまどひ〜

同八年　辛未　十月閏

三月十九日江戸中に疫病〇同廿日諸国に露疫

○四月二日浅草寺上〇去年より今年に至る六十余度癩疫を祈

むる〜〇東叡山に大仏像造立あり　塩屋彦兵衛泥を練りて石のやうに

て頭髪〜て解〜を撮　清水観音堂建〇八月大風家屋を壊す　樹木

を折る〇十月疫病〇十月十二日後藤氏五代道喜卒　八十七

○十月十七日上野大仏焼落　依て大仏殿修復之　彫り直し一丈八尺余

同九年　壬申

諸家深秘録に云今年より奥州仙臺の米穀始て江戸へ出る今

年江戸に米の値段高の事なり

○中村勘三郎芝居中橋ちかく稲荷宣町へ移る　今の人形町なり

○茶盧雑談云　寛明日記寛永九年の件に英俊一名弁殿京都にあまたの弟子ありしが十数の内和と見えたり

○玉家屋敷居二所漏處なり居還しぬひ七月廿七日に廣小路へ

新田の廣徳寺に寓居の弱近堀氏に寄居を置き

二所を大徳に帰せしめ給ふ　近居所寛永十に年麻布に寓居あり　ばかり居を移して横東庵といふ

寛永十年　癸酉

上野忍の根道春先生別荘に先聖殿を建る　尾張の名古屋に建立ありし殿を移す　なり事八幡宮文案稲荷記に詳なり

○正月廿一日廿二日就國大地震小田原へ別きたる説〻同廿六日申刻大地震

○武州忍の城主阿部大蔵少輔殿へ移り城番の

面〻江戸へ帰宅地を賜ふ　武州忍城番の家来忍町とよぶ

○二月より六月まで洪水○南北の町二十間の小川を堀ぬ町屋せり

せり○都城内芝居出来あり　東洋

同　十一年甲戌　七月閏

正月十又日湯上人念佛三昧ありて陰徳の家畏の後

永劫寿命と舎利とあり○二月二日　御城の御能芝居町人

狂言をつとめる　青羽を揚る　見物ありけるとぞ　或記

見物ありし○三月九日彩色師大橋宗桂　八十七

○三月十又日新白雲月を貫く○玉造稲荷社　芝神明宮

西久保八幡宮　同忍亟動堂等御造営あり　仏名も出来建立

○品川妙光寺本堂及宝塔二基門出来建

○平塚明神社御遷宮終日至て盛然し

○同年より山王法華御修行大ひに興る

○富林山善昌寺鞆町代地にして開山堂建る

○七月琉球人来聘（此使依数多之金銀あり 京二条城にて饗応）○村山又三郎芝居葺屋町に於て始て興行（市村羽左衛門初なり）○八月八日或る異の法家の室（おさんのむしゃ 出産）歯をあやまりひ終に今日終由なり 源経忠遠流あるべしと雖ひ（阪倉宮に参詣の上出家あり人々も異論を唱るもの多し）

○明人安計（後焼の江戸日本橋安計町をなせり）又赤州二浦逸見村を願て其妻妾娘満尼今年七月十六日終逸見村浄土寺墳墓あり

安計ら忌日に墓碑を搆へて弔ふ

寛永十二年乙亥

正月廿五日寅刻大地震年来刻又地震あり○後府中五番始る

○春鳥九大納言光慶卿宮中東山下向あり（此時世人京に下向あり）（此道筋のつもりなり）又源通村卿も東下向あり

春あるにぬ木の葉もうるむさ一時まさてうるる雪の恵み

○安定九の御船浮屋とり来る（一張不實永十一年とも云 柳川町の辺に船を作り繋ぎ置一年大風雨の時漂切て浮屋と成る 二年より此船を解ひ捨る人）○二月天台龍家寺浄金殿河岸ら浅草に移る○同月朝鮮人来聘（和田倉門の内なる城中に韓人曲宴を奏る）

○六月十二日大風遠見丹後海の船八百艘破損

○七月天赤くして焼○ら婦如来寺釈迦如来を安置（本合個唱上人建基）○八月茅場町茅師如来安置

○八月四日特殊山樂寺建立 七十七 ○堺町天下一作り薩摩寺文

幕を嵐山戸の上に張人形衣裳結構をこらし又弄花技沒
其の長歌なる義をこらせしうハ意他勝ニ所も其の様に
ハ

寛永十三年　丙子

二月元日日蝕　○高田ふハ幡宮勅請ハ此時八終
の小祠之を張之宗
中を遷く山遷誉者　○大城御郭廓恵塔見附柳形宮御善造あり此の時
御堀迄移社を流所ニ移る

芳葉集　寛永十三年江戸ニ行ふ大樹城廓修理のあり其ハ

人清ふ千代の石も世ハこゝの地さまの基ふ
南向寄橋云麹町六七町目の北ニ宮殿町の辺江戸ニ行ふ今年ハ御廓を造
せ給ふ附ハ堀の掘方を以て東西の岸を堅平地ふ成ふ山ハ高ハ西ハ
もいやと又田舎ハ遠ハ江戸ハ紙ふ江戸ハ高ハ山ハ高ハ
御入国の附今の猪町ハ例番町永田町ハ西ハ八幡ハ高ハ
とて江戸ハ高ハ　御堀をきめ市ヶ谷の長ハ西ハ

江戸人さ〜こゝ〜加江戸ハ云ふ云ふこと有りこの江番清の時京都より牛車家来
り牛車の金物ハ市谷八幡の前の地を中〜御用の
移りて後江戸ハ止ハ寛永十六年
芳葉集　今の牛町をのもの〜

○井の頭弁才天社御遷座　○高野辻書記を賜ふ五年ともいふ

○江戸宮殿後六代葉安家　此十三年

○八月六月の頃ハ西ハ大雨紀伊ハ
南海ハ海嘯ハ
○新銭を鑄〜る　寛永通宝
と書ハ

八月朔日より通用始る是より以来朝
の銅銭ハ〜ふ
江戸ハ銭ハ〜ふ
嘯海嘯ハ〜ふ
の銭ハ〜ふ
完全ハ〜ふ
まハ工を愛ハ〜ふ
形ハ〜ふ

武江年表卷之一

源ありし氏名は忘れたるに世より稀なり

○十二月朝鮮人来聘　正使白鏸經筵副使東渲金世濂
從事青丘芙床　猿飯本樵之之

武江年表卷之一畢